

大須賀地区の民話伝承の衰退と再発見

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-01-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河田, 弥歩 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/9957

大須賀地区の民話伝承の衰退と再発見

河田弥歩

- 1 はじめに
- 2 民話紹介
- 3 衰退の理由
- 4 おわりに、民話の再発見とこれからの伝承

1 はじめに

今まで民話はどのように調査されてきたのだろうか。日本の口承文芸を専門とする花部英雄は山形での調査について以下のように述べる。昔話を教えてほしいと訪ねて紹介される人は、その土地で語りの活動をしている人が多い。そして、その話を誰に聞いたか尋ねると、本から借用したり先輩から聞いた話のアレンジして自分のものにしたと答えられたそうだ。したがって、子供の頃に聞いたその地域に元々伝承されていたような話をしてくれる人はいなくなったのだという（花部 2009: 211）。

今回の調査で、私は民話の伝承について調べてきた。ここでの民話とは人びとの中で伝えられている伝説や昔話などの不思議な話とする。掛川市立大須賀図書館で大須賀地区の民話に関する文献を探したところ、『大須賀町誌』第十章「民俗」の第八節「伝説」には16個の伝説が、『遠州の伝説』の中には大須賀町（旧横須賀町）の11個の伝説が取り上げられている。また1953（昭和28）年から1959（昭和34）年に発行されていた地方紙の「社会と新聞」で大須賀町の史話と伝説が掲載されていた。その記事をまとめた『古里よもやま話』は第一集から第七集まで続き、内容が重なっているものもあるが、合計40個以上の伝説や民話が登場する。文章として残っているものだけでもこれほどの数があることから、大須賀地区には多様な民話が存在するといえる。その内容を見ると神社や寺に関わるものと自然に関わるものが多い。神社や寺が多く、海に近い環境が多様な民話を生んだのだろう。

実際に私が大須賀地区で伝説や昔話について尋ねたところ、花部の体験と同じように、昔話を知っているのではないかと紹介された人は本から話を知ったという人が多かった。そしてそのような人びとはまちづくりなど地域の活動に精力的な人ばかりであり、一般的に聞くことができたのは五つほどの話であった。それもよく耳にしたのは三つほどである。特に横須賀では民話について知らない人が多いように感じられた。

横須賀は古い町並みや長く続く祭りなど「伝統」を大切にしている地域だ。なぜ、かつては多く存在していたと思われる民話は現在まで伝承されていないのだろうか。また、民話を知っている人の中でも 60 代以下の人は誰かから直接聞いたのではなく本や新聞、テレビといったメディアで目にしたという。伝承が一度途切れたものが再び目にされているのである。桜井徳太郎によれば、地域社会のなかでは様々な信仰が成立し、発展し、消滅しており、中には消滅してからもう一度花を咲かせる場合もあるという（桜井 1979: 18）。今後、大須賀地区で発見された民話は再び伝承されていくだろうか。本章では大須賀地区の民話が衰退した理由と再発見の可能性について考える。

2 民話紹介

まず、今回私が大須賀地区の民話をめぐる状況について記述、考察する上で登場するいくつかの民話を紹介したい。

清明塚

清明塚とは大淵浜部落の海岸近くにある小豆色の石が積みあげられた小さな塚である。大須賀地区の人に何か民話を知っているかと聞いたとき、一番に挙げられるのは清明塚についての民話である。また『大須賀町誌』の第十章「民俗」の第八節「伝説」でも最初に取り上げられている。大須賀地区の民話の代表といえるだろう。この話についての記述はいくつもの文献で見ることができるが、国学者の中村乗高が遠州地方を中心に民間伝承や不思議な話を集めた『事実證談』には以下のように述べられている。

城東郡雨垂村の浜辺に、清明が塚と号て砂浜の中に赤き石のみ有所あり。旱魃の時、其わたりなる村々よりそれに雨請するに、人びとそこに至りて何をあてともなく其石を踏散のみなりとぞ。かくて後に見れば、いつしか有し如く其石集り居り（し）とぞ。いかなる由縁にて清明が塚とはいふぞと尋ぬるに、むかし清明といふ人、其わたりへ潮の入まじき咒法せし所なるゆえ、其塚わたりには潮入事なしと其辺の人の物語なり（中村 1823）。

清明塚はここでは雨乞いの神として、また津波を防ぐものとして記述されている。他にも、疱瘡にかからなくなる、参詣の時に小豆色の石を一つ持って帰りお礼の時は他の石を加え二つにして返すとその石も一晩で赤くなる、願い事が叶うとも信じられている。

大鐘ばあさんの火

この話も大須賀地区ではよく知られている。『大須賀町誌』や『古里よもやま話』によると、大鐘ばあさんは横須賀近くに多くの田畑を持っていたが、家の人が次々亡くなった、

もしくは田んぼを騙し取られたことで、失意のうちに亡くなった、とされている。貯金を楽しみにしていた老婆が財布を落としてしまい、それを気にして亡くなってしまったという話もあり、私が実際に会った人から直接聞いたものはこちらの話ばかりだった。また、大鐘ばあさんのものとされる墓がある寺の檀家である鈴木武史氏（男性、50代）によると、優しいお婆さんが主人から預けられたお金をなくしたという話もあるという。このようになぜお婆さんが亡くなり彷徨っているのかは諸説あるが、大鐘ばあさんは火の玉になって現れ「遠い遠い」と言うのと近くに、「近い近い」と言うのと遠くに行くという。

波の音

『大須賀町誌』に記録されている民話「波の音」は以下のような物語である。

ある日漁師の網に気味の悪い怪物がかかったそうだ。そして助けてくれるのなら天気が悪くなる前に海の底で太鼓を鳴らして知らせると言ったので、漁師たちは怪物を殺さずに海へ帰してやったという。それ以来天気が悪くなる前には遠くまで波の音が聞こえるそうだ。実際天気の悪い日を思い返し、鈴木氏は「本当に津波かと思うくらい町中に音が響く」と話す。

おねんねこさま

三熊野神社では毎年4月の第1日曜日に神子抱き神事が行われる。その日は「おねんねこさま」という人形を抱いて子どもを授かろう、と遠方からもたくさん女性が集まる。このおねんねこさまについて、鈴木氏は三熊大社の前代、現在の宮司両方にこう聞いたことがあるという。「箱にしまっていたおねんねこさまを次の年もう一度出すと、必ず裾が擦り切れている。入れ方が悪かったのかと思ったが、きちんとしまっても毎年おなじようになる。それはおねんねこさまを抱いて子どもを授かった人たちの元に魂を運んだのは、おねんねこさま自身だからではないか」という話である。鈴木氏は実際おねんねこさまを見せてもらったそうだが、確かに裾が擦り切れていたという。

3 衰退の理由

前節では、文献や民話に詳しい人びとの語りから大須賀地区に伝わる民話のいくつかを紹介してきた。本節では、数多くの民話が記録されている大須賀地区に暮らす人びとの間で民話が衰退している現状について記述する。大須賀地区に住む人びとに実際に民話についての話を聞いたところ、ほとんどの人が民話について知らない、もしくは一つや二つぼんやりと知っている程度だという現状が明らかになった。それも、その一つ二つは晴明塚、大鐘ばあさんの火、波の音であった。なぜかつては多様な民話が伝えられていたこの地域で民話は現在姿を消しつつあるのか。知識人や高齢者など民話を知る人に話を聞く中でその理由がみえてきた。

自然との関係性の変化

元教師であり、議員の経験もある山口治氏（男性、87歳）によると、子どもの頃は川でうなぎを取るなど、自然の中で遊ぶ人が多かったようだ。しかし、戦後になると農薬が川に流れるようになり川から生き物がいなくなったので、泳ぐ人もいなくなったのだという。また、山口氏は昔の海は今でいう遊園地だったと表現していた。「ホー」という漁師の声で魚が来たことを知らせ、漁師以外の大人も子どもも海岸に集まっていたそうだ。そして凧を揚げ、釣りをし、海に入り、子どもは海近くに干してある魚をおやつにもらっていたらしい。今の海については、観光客用に地引網を出してくるくらいで進んでは船を出す人もおらず、地元の人が集まる場所ではなくなったという。そして防波堤の役割もしている自転車道ができ、風景が変わりすぎてしまった海岸を見たくないという思いも語ってくれた。

山口氏は昔の風景についても交えつつ民話の話もしてくれたのだが、途中「海岸の話が多いんだな」と呟いた。民話、波の音について誰から聞いたのかを尋ねたところ、誰に聞いたということもなく自分でその音を聞いて、見に行き、その中で自然と知っていたのだという。この話が結局何を伝えたいのかというと、気象の変化は気象庁ではなくその土地の人が一番よくわかるという意味だと山口氏は考えているようだ。

自然は恵みも災害ももたらす大きな力を持つ。その大きな力と上手く付き合いながら生活する中で波の音のような民話は生まれる。大須賀地区の民話に海岸の話が多いのは、漁が盛んだった時代は山口氏が思い出の風景として語ったように漁師を中心に海と人びとの間に密接な関係があったからだろう。民話は海との付き合い方を伝える一つの手段だった。そして大須賀地区では漁師がどんどん姿を消して海と人の関係が薄くなったことで、不思議な話としてのみ伝わるようになったのだろう。結果、作り話、本当だとは思えない話として伝える価値がないと思われるようになったため、伝承は途切れたのではないだろうか。

伝承の途切れ

ここでは伝承がされる場所を大きく家庭と地域の二つに分け、それぞれで伝承が途切れている理由について考える。

家庭での伝承について、かつて横須賀の大地主の家庭で育った小野たみ氏（女性、92歳）に話を聞いた。小野氏は大鐘ばあさんの火を実際見たことはないが、話は家のお年寄りから夜に聞いたことがあるという。

小野氏が幼かった頃、親はやる事がたくさんあって忙しかったので、怖い話をして早く寝させようとしていたのではないかと、思っているようだ。では自分の子どもや孫にその話をしたことがあるのか、と聞いたところ、「ない」という。その理由を小野氏は「子どもの時はそういうこともあるかと思っていたけど今はそんなことありえないと思って

いるし、娘にも孫にも今の人にそんな話しても信じないから言わない」と説明している。そもそも小野氏の孫は家に入るとすぐテレビをつけるので、会話することがほとんどないのだという。メディアが発達し娯楽があふれている現代、家庭内の関係性は希薄化している。それは民話だけではなく、家族間でのあらゆる伝承が途切れている理由だろう。また小野氏の話からは「ありえない」「信じられない」話は伝える価値がないと考えられているように感じられた。科学的な物が非常に大きな価値を持つ現代社会で、非科学的な話は意味を見い出されにくい。次の「距離と管理」で紹介する鈴木氏のように民話に特別な意味を見出さない限り、家族間で減少している会話の中で民話が話題に上ることはかなり稀なことになるだろう。

地域での伝承については、地域の結びつきについて聞いた話を基に考える。他の章でも述べられているように、横須賀には祭りによる強い地域の結びつきがあるといわれている。しかし、実際のところ、その結びつきは現在の他地域と比べて強く見えているのであって、昔と比べると弱くなってきているのではないだろうか。以下の鈴木氏や竹内誠人氏（男性、60代）の話はこうした疑問があながち間違いではないことを物語っている。たとえば、鈴木氏に神社や寺について話を聞いたところ、小学生の時は近所の子どもたちが集まってくる遊び場だったという。神社の急な階段を自転車で下った人がいたという話など、たくさんの思い出を語ってくれた。今はゲームなど家の中で1人でも遊べるので、近所の子どもが集まって遊ぶ姿はめったに見ないそうだ。また、竹内氏によると大鐘ばあさんの火の話は祭りの稽古場である公民館でされていたようだ。竹内氏が幼いころは寺に置いた太鼓のバチをとってくるといような度胸試しがあり、行く前に大鐘ばあさんの火のような話を上の衆や年寄り衆から聞かされたらしい。

一方、横須賀小学校の男子児童2人（10、11歳）に話を聞いたところ、現在の稽古場で度胸試しはされていないという。稽古場では練習が終わるとすぐに帰ることが多いようだ。稽古後の青年は、祭りの前は太鼓をきつく締め直すなど山車の準備をし、祭りまで時間があるときはゲームをしているらしい。小学生たちはそれを見ていることはあるが、一緒になって遊ぶことはないそうだ。以上のことから、少なくとも子どもたち同士の結びつきは弱くなってきていると考えられる。稽古といった特別な場所と時間の外では子どもたちが年代を超えて共に活動する時間は少なく、民話を一部が知ったとしてもそこから広まる機会はなくなる。

距離と管理

当然のことではあるが、民話についての知識量はその舞台との距離でかなり変わってくる。近いと興味の有無に関係なく自然と知る機会が多く、遠くなると興味を持たなければ知ることがない。ただ、近くで自然に知ると遠くで興味を持って知るのは違いがあるということもわかった。

たとえば、横須賀で大須賀地区の民話を知っているかを聞くと、知らないと答える人が多い。民話を知っている人も、まちづくりに関わる中で知ったという人がほとんどだ。内容について聞くと、よく知らないと言われるか、町史の伝説のページを示される。また、実際には足を運んだことはない人や一度行っただけという人が多い。

そんな横須賀では珍しく民話に興味を持ち、文献を読んだり足を運んだりと積極的に民話を知ろうとしている鈴木氏に民話に対する想いを聞いた。彼も元はまちづくりについて考える中で民話に注目したそうだ。しかし現在、鈴木氏は古い話はそっとしておきたいという。それは実際民話の舞台に足を運ぶことで起こった気持ちで、理由はいくつかあるようだ。私は実際、いくつか民話の舞台に案内をしてもらった。はじめに足を運んだ清明塚には供え物と思われる飲み物や塩、置物があり、積まれている赤石のいくつかにはお礼の言葉が書いてあった。それを見ながら鈴木氏は、石一つにも思いが詰まっている場所を騒がせたくないという。また、こういった場所にくるとぞっとするような気持ちがあると感じるそうだ。民話には必ず何か裏の意味があり、後世を生きる人びとに対し警鐘を鳴らしていると考えているそうだ。石が赤くなるという話についても調べたらそういう物質があり、その物質は宇宙に関わっているのではないかと語ってくれた。

一方、清明塚周辺の地域では話を聞いたところ、私が出会った人たちは皆清明塚のことを知っていた。どこで知ったのか、誰に聞いたのかを尋ねたところ、大淵小学校の女子児童（8歳）は祖父の持っている本で知ったという。中新井に現在住んでいる人の中で最年長の佐藤氏（仮名、90歳）と清明塚がある大浜に住んでいる高橋夫婦（仮名、夫70歳、妻71歳）は誰に聞いたということはなくいつの間にか知っていたらしい。実際足を運ぶことはあるか聞いたところ、回数に差があるが行ったことはあるという答えが返ってきた。内容についても体験を交えながら語ってくれた。宝くじを買ったときや受験前、たいした理由がないときにも足を運ぶことがあるらしい。高橋夫婦は息子（28歳）が高校生の頃に甲子園に行けるよう祈願をするために訪れたという。そして、話を聞いている中で清明塚には遠くの人が行くことが多いということもわかった。観光バスが止まっているのを見たり、訪ねてきた人に場所を聞かれたりすることがあるらしい。民話の舞台が近い環境では、自ら行動するだけでなく、外から働きかけられることによっても生活の中で民話を意識するのである。

また、大浜は清明塚を管理している部落であり、シニアクラブの人たちが年に3回掃除をしている。近いだけでなく管理をしている部落に住んでいるため、清明塚周辺の他の地域に住んでいる人と比べ、高橋夫婦は清明塚の赤石についてかなり詳しく語ってくれた。大浜周辺の土は鉄分が多いため、白い砂岩が時間をおくと酸化して赤くなると述べている学者もいるそうだ。そのため、どんな石を持って行っても赤くなるわけではない。また、大井川が流れていたころは川岸に赤石や赤っぽい石があり、今の清明塚にある赤石は大井川や天竜川から大浜の清明塚を管理する人たちが取ってきたものだという。元は今ほどき

れいな赤石ではなかったらしい。高橋夫婦は願掛けで石を持って帰ることはあるけれど、石を返す時にはなるべく赤い石を探して返すと述べた。

このように、民話の舞台の近くに住むことで自然に民話を知っている人は、生活の中で気に掛けながらも、その不思議な力を過信することなく距離を持って関わっているようだ。それに比べ、民話の舞台から離れつつもそれに興味を持って民話を知ることとなった人は、その不思議な力に過度な期待をかけてしまうことがあるのだろう。

「お祭り」熱

大須賀地区といえば、まず一番に挙げられるのが祭りだろう。この報告書の中でも祭りについての話が占める割合はかなりのものである。そこから分かるように大須賀地区の中でも特に祭りの中心である横須賀では文化、経済、教育など、すべてにおいて祭り抜きには語ることができないものが多い。もちろん民話の伝承にも祭りは関係している。

結婚を機に福田町から横須賀に来た大石氏（仮名、女性、70代）に「大須賀地区について家庭内で昔の話を聞いたりした経験はないか」と尋ねたところ、「この話はお祭りばかり」という答えが返ってきた。また郷土研究会の岡本久生氏（男性、78歳）は、横須賀の人たちは祭りにだけ興味があるので歴史が好きな人はあまりいない、と話した。祭りに興味が集中するあまり、歴史に限らず他のことに興味が向かない環境が横須賀にはあるのではないかと。話題も祭りのことに集中し、他のことは伝えられなくなっているのではないかと。反対に、祭りに対する関心が低い地域では他のことにも興味が向きやすい。距離と管理で述べた大浜や中新井は横須賀ほど「お祭り」熱が高くない、三熊野神社大祭に参加しない地域である。

昔から横須賀では祭りに興味が集中しすぎていたのならば、横須賀に住む人は年齢に関係なく民話について知らないはずである。しかし伝承の途切れで紹介した小野氏や元議員の山口氏は、幼い頃生活の中で民話を耳にしている。そこで、小野氏に幼い頃もやはり祭りの話を聞かされることが多かったのかを聞いたところ、女の人は関係がないから祭りの話はしなかったという。遠くで見ているだけで、罰が当たると言われて山車に触ることもできなかったそうだ。河原町に住む栗山房代氏（女性、79歳）も、昔の祭りを思い出して「おっかない」と言っていた。今は女性の参加者も多く、横須賀全体で祭りを中心にまわっているように感じられる。それは昔からずっと続いているのではなく、近年「お祭り」熱が高まってきて変化しただけだ。

遠州横須賀倶楽部の竹内氏は、今は民話について話さなくなっているが、世代に関係ない共通の話題は祭りがあるのだという。なぜ共通の話題が祭りなのかというと、祭りは時代が変わっても極端に変わることがないので「昔はこんな大きな喧嘩があった」というような話題は、世代に関係なく盛り上がるそうだ。だが実際は祭りを取りまく環境に変化が生じたからこそ、大きな共通の話題となっているのではないだろうか。そして民話や歴史

など他の地域に関する話に向かって興味も祭りに集まり、祭り以外の伝承が途切れているのだ。

4 おわりに、民話の再発見とこれからの伝承

現在大須賀地区で民話が再発見されるのは本や新聞、テレビといったメディアを通してである。そのきっかけは偶然や興味によるものだけではない。桜井徳太郎によれば、地域共同体の信仰現象や宗教行為は常民の日常生活に密着しながら展開していくので、絶えず生活のなかで具体化する傾向をもつ。そして具体化は民衆の切実な要求、願望（宗教的ニーズ）を満たす形で繰り返されるので、その都度、再生産されるという側面をもつという（桜井 1951: 2）。山口氏は議員になったこと、竹内氏は遠州横須賀倶楽部で活動をはじめたことをきっかけに地域を見直そうと思い、いくつかの大須賀の民話について知ったそうだ。山口氏も遠州横須賀倶楽部もまちづくりに精力的だ。現在の大須賀地区の人びとの要求、願望はまちづくりに向いている。この点において、かつて漁業が盛んだったころ海についての民話が伝えられていたように、現在の大須賀地区ではまちづくりに繋がる民話が伝承されやすい環境にあるのではないだろうか。遠州横須賀倶楽部の藤田鉄二氏（男性、51歳）は「今の時代、内とか外とかに留まっていたはいけない」と語った。「最初から大須賀のことを知っていて好きな人ではなくとも、まず足を運んだことをきっかけに好きになってもらいたい」という。そのために外へ向かっていかに発信していくかが大事だと思っているそうだ。

桜井は「現代における経済変動や交通禍による生活不安と事故死の増大により、巫家へ駆け込み呪術宗教者の祈祷やト占によって安定化をはかる率は、むしろ逆に高まっている。民間の要望を担う伝統的シャーマンがいなくなれば、人びとは疑似の祈祷師か呪術性の強い新興宗教へと走ってゆく。つまり伝統的シャーマニズムの再生現象がおこる」と述べている（桜井 1979: 18）。

そこで、これから内部と外部両方へ発信していくのに打って付けなのが「清明塚」と民話紹介の最後に挙げた「おねんねこさま」の話である。清明塚に関しては一般的に著しい衰退を示している巫業（ユタ）と同じことがいえるだろう。かつて雨乞いや津波に効果に限られていた清明塚は、由緒がどのようなかは置いておいて、疱瘡からはじまった様々な願いを叶えるパワースポットとして知られるようになり、各々要望を持った人たちを遠方からも集めている。おねんねこさまは三熊野神社の子抱き神事に使われる人形だ。そして三熊野神社の大祭が横須賀の人びとが熱を入れあげている祭りであることから、人びとの生活との関係は深いといえるだろう。また、近隣だけでなく東京や大阪など各地から人びとが集まるといふ子抱き神事にまつわる話は外へのアピールに向いている。

ただ、外から人を呼ぶために民話をアピールすることに誰もが賛成しているわけではない。高橋夫婦のように自分たちも観光をするので逆に訪ねてくる人がいてもいいと考えて

いる人もいれば、距離と管理で挙げた鈴木氏のように民話の舞台はそっとしておきたいという人もいる。民話をめぐって、大須賀地区の中にさまざまな声があるという現実を考慮する必要があるだろう。

参考文献

大須賀町誌編纂委員会

1980 『大須賀町誌』大須賀町。

桜井徳太郎・西垣晴次・鈴木昭英・宮家準・伊藤唯真・高松敬吉・小松和彦・藤井正雄・
花部英雄・松本孝三

2009 『語りの講座——昔話への誘い』三弥井書店。

中村乗高

1965 『事実證談』美哉堂書林。